

ベトナム（ダナン市）の現地調査記録

ダナン経済大学での研究会：2018年3月16日実施

ダナン経済大学は本プロジェクトを通じて本学アジア産業研究センターと組織間協定を締結したベトナム中部の経済系のトップクラスの大学である。

ダナン経済大学のキャンパスにおいて、研究会を実施した。ここでは、最初に双方の研究者から最近の研究成果について報告があり、引き続きディスカッションを行った。当方からは本プロジェクトのうち、東西経済回廊などが連結するベトナムーラオスータイの陸上インフラ、工業団地、海外企業の投資、現地企業の発展について、これまでの成果を報告した。ダナン経済大学からは経済発展に伴って、当地で年々関心が高まっている。医療関連サービスにおける人的資源管理について報告が行われた。

IT企業：2018年3月16日実施

ベトナム最大のITソフトウェア開発企業、FPT社のダナン支社を訪問した。同社は先進国からのオフショア開発の受注によって急速に発展した企業である。現在、アジアのみならず、北南米、欧州にも拠点を設けている。日本には子会社を設立している。同社は日本市場を最も重視しており、IT知識だけでなく外国語を社員に習得させることにも注力している。社内には日本語学習施設があり、レベル別の教育が行われていた。

今後はオフショア開発の受託だけでなく、クライアントの組織や戦略の構築支援を行うシステムコンサルティングの分野に企業を発展させる計画である。社内には優秀なベトナムの大卒者が多く働いており、このなかから将来、スピンアウトしてIT企業を起業させる人材も現れてくることを予感させた。

ダナントラック協会：2018年3月17日実施

ダナンの陸上運送の要となる団体である。協会長が経営する運送会社のコンテナデポを訪問した。以下のような内容の話があった。

ダナンのトラック業界の多くが国際的なフォワーダーからのベトナム国内輸送の受託であるという。ダナン周辺にはダナン港以外にも中小の港が多く、それぞれの港を「縄張り」とする小規模・零細トラック業者が多く存在する。したがって、外資系の大手フォワーダーの「下請け」に留まらざるを得な

い。メコン地域に国境を越えたビジネスを展開していくのは困難な状況である。小規模であるがゆえに社員教育も不十分でAEC成立による国境ロジスティクスに独自に参入していくのは難しい。

自分の会社では日本の三井系のフォワーダーからの仕事が多く、また日本のベトナムへのODAプロジェクトに関する資器材の輸送にも携わってきた。日本との関係が深い仕事をしてきたからか娘は日本に留学して、日本の大学への進学を希望しているとのこと。

トラック業者が数多く存在するため、過当競争で価格競争になっており、利益を確保して発展していくためには新規ビジネスを考えざるを得ないとし、現在、同社では空いた中古コンテナを改造し、可動式店舗やオフィスとして販売している。

日系フォワーダーダナン支店：2018年3月18日実施

インタビューには支店長が対応し、以下の内容で話があった。当社の荷主はほとんど日系企業である。したがって、日系企業関係の荷の流れに基づいて話す。

AECにより経済的な結合が強まっていると言ってもモノの流れが双方向で均衡する状況にはなっていない。例えばタイからラオスを通してベトナムのダナンに運ばれる荷はあっても、その逆の荷がなかったりする場合が多い。したがって、東西経済回廊（9号線）に「定期便トラック」を走らせるのはビジネス上無理がある状況である。それすら量的に多いものなどは船でバンコク港からベトナムの方が荷主にとってメリットがある。この原因はベトナムの工場からタイの市場に運ぶ製品のサプライチェーンがまだ細いためであると考えられる。他方、中国南部とベトナム北部とのサプライチェーンが太くなっているため、ベトナム北部—中国広東省などを結ぶ荷は多く、定期便の経済性は比較的高い。